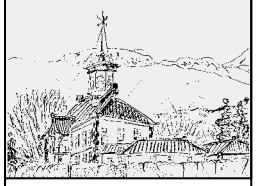
城北



令和6年1月1日現在

総世帯数		3,784
総人口		7,822
	男	3,744
	女	4,078

人権啓発推進協議会 視察研修

12月6日に満蒙開拓平和記念館を30人が視察しました。

満蒙開拓団とは、戦前からの不況への国策として「満州国」に送り出された農業移民です。しかし、実際には日本政府が現地住民の土地を強制的に安く買い上げ、日本人に配布し、小作人として中国や朝鮮の人を働かせていたもので、現地住民にとっては侵略同然でした。

館内見学の後、満蒙開拓の体験者である語り部、中島千恵子さんによる講話をお聞きしました。中島さんは、昭和10年に現在の飯田市に生まれ、同16年に満州内陸の水曲柳（すいきょくりゅう）開拓団へと入植しました。

徴兵を免除されていた開拓移民も、旗色が悪くなると戦争に駆り出され、現地には女性や子ども、高齢者が残されます。日本敗戦後には、積年の恨みから、現地住民らが開拓団を襲撃。抵抗力のない開拓団の凄惨な逃避行が始まります。各地で死者が出たほか、集団自決も起きました。中島さんも同じく襲撃に遭いましたが、中国人らと助け合う関係だったこともあり、襲撃当時に彼らが守ってくれただけでなく、別の開拓団集落まで送り届けてくれたそうです。「ここまで助かった人は滅多にいない。中国人と関係を築いてくれていた母のおかげ」と中島さんは話されました。後に逃げ延びた収容所では、飢えや伝染病による死者も多く、近くの畑がいつしか亡骸でいっぱいになったと言います。

▲満蒙開拓体験者の中島さん（左）

開拓団員のうち、襲撃、集団自決、収容所生活等により約3割が故郷を夢見たまま亡くなっています。結びに、中島さんは「今も外国では戦争が起きている。人間が殺し合うことは情けないこと。みんなで戦争に反対し、日本も世界も平和で助け合ってほしい」と語られました。

ふれ愛を育てる集い 講演会

誰もが住み慣れた家、地域で最期まで暮らすことができる地域づくりを目標に、城北地区住みよい町づくり協議会 福祉の部会主催で12月16日に開催されました。

テーマは、いざという時に助け合える城北地区をめざす～〝最期は自宅で〟の想いをあきらめないで～として、「訪問診療クリニック樹」所長の瀬角英樹先生を迎え、出席者は86人でした。

先生のお話は、城北では2回目でしたので、今回は、なぜクリニックを開所されたのか、訪問診療と往診とのちがい、終末期医療、認知症患者さんへの対応について話されました。病院への受診を希望しないが、診察を受けたい方に自宅に伺い診療するのが往診、疾患を抱えて生活している方が徐々に体力が衰えたり、疾患の進行によって通院が困難になった場合に自宅へ訪問して診療を行うのが訪問診療です。

終末期医療を自宅で過ごすには、本人が自宅を選択する意志が重要であり、周囲の人もそれを受け入れる体制をつくり、最期まで自分らしく自宅で生きることを目指して努力していってほしいと話されていました。「いつもの日常・家族に囲まれて・最後まで自分らしく自宅での往生」の**満足死**、誰もが望む言葉、とても印象に残りました。

▲「最期は自宅で」の気持ちに、訪問診療で応える瀬角先生

▲多くの参加者が集まりました。

北部防犯協会視察研修

12月18日長野県警察学校を22名で視察しました。

今回の研修では、長野県に警察官として採用された方の教育訓練を行なっている警察学校について、教官の伊藤さんより教えていただきました。最初に、ビデオによる警察学校の一日の紹介がありました。警察官の募集は年に2回あり、4月と10月に初任科生として入学します。大学卒業者は教養期間が6ヶ月、高校卒業者では10ヶ月あり、教室で行う座学と技術を身につける訓練があります。学校は全員寮生活となり現在、北、西、南の3寮があり、合計65名（女性23名）の方が6時から22時半までの間、警察官として勤務するために必要な知識・技術を身につける教養を積んでいるとの説明がありました。その後、学校内の各教室や厚生施設、寮生の部屋を見学しました。学校内は常に整理整頓時間厳守の生活をされているとの紹介がありました。

最後に、厳しい学校生活を卒業して各交番に配属された新人警察官を「温かい目で見守っていただきたい」とのお願いが教官よりありました。長野県の治安を守るために若い警察官がほぼ一年間にわたって学習する姿に頼もしさを覚えました。

▲警察学校について学ぶ参加者

城北の年末年始

ふれあい健康教室
12月18日

蟻東だべり会
12月8日

のびのびひろば
12月19日

しめ縄作り講座
12月18日

書初め大会
1月4日

三九郎
1月6～8日

▲田町・新田町・北馬場・徒士町・旗町町会

▲蟻ヶ崎北町会▲